

中国内の個人旅行は、まだ一般的ではなかった。しかし、私と岩永さん（現埋蔵文化財センター副所長）は、代表的な中国大陸の遺跡と博物館を見て回りたいと思い立った。移動の間は、私たち2人だけ。車、飛行機を降り立てば、通訳と運転手が待機しているという計画である。想像する大陸的なルーズさが気がかりであったが、外貨獲得の一環として国外からの旅行者は、迎賓扱いなのだ、と到着して理解した。国家的な統制は、むしろ行き届いていた時代である。

1983（昭和58）年、11月23日、大阪から、空路上海へ。一息入れる間もなく列車に乗り、いきなり5時間ほど列車に揺られ、その日の内に南京へ向かった。

南京の朝、中国大陸最初の朝。日本人として中国に、そして南京の地に立つことの意味を、大陸の大地に差しはじめた朝日の中、再度反芻してみる。

南京では、南京博物院、中山陵、明孝陵などを見学、途中長江の雄大な流れに吸い込まれるように見とれる。至る所、人民服が主流である。建設現場の足場は竹製、工事も機械より人力が有効である。

夕刻、南京を離れ、夜行列車で鄭州へ向かう。同じ寝台客室（コンパートメント）には、他に初老の中国人男性が一人、シガリロ（小さな葉巻）をくゆらせ、身なりも他と違う。「一般」は、寝台客室は利用しない。ならば、いわゆる「幹部」に属する人物であろうと、勝手な推論を二人で嘯きあう。

朝、7時前に到着、迎えの車に荷物を積み込むと、さっそく河南省博物館、商代遺跡などを見学する。河南省博物館は、典型的な陳列博物館であるが、施設の巨大さや展示物の物量など月並みであるが「中国四千年の歴史」を月並みに思い知らされる。

翌日、洛陽までの長距離を車で移動する。途中、鞏県石窟、宋陵、唐三彩窯跡などを見学。

しかし、途中で渋滞に巻き込まれた。この広大な中国大陸で渋滞とは。未舗装の狭い幹線道路、渋滞の理由は人身事故であった（そう言えば、クラクションを鳴らしながら、人を蹴散らす運転、事故は日常茶飯事ではあるらしい）。通訳が、連なる車の最前列に走っていく。やがて、5・6台先の車の脇に通じる耕作地の畦道を、通訳を乗せたパトカーがやってきた。通訳は、私たちの乗る車の前を塞ぐ5・6台の車を強制的に道脇に誘導し、1台の車が通れる隙間を確保する。後は、パトカーに誘導されて、強引な迂回路を突き進むだけである。

この通訳の名前、「元固」と書いた。私たちは「ガンコ」と密かに呼んだ。ホテルの夕食、冷たかった。さっそく、彼は料理長を呼びつけた。暖かい食べ物がやがて運ばれてきたのは勿論だが、翌日の同じホテルでの昼食、食べきれないほどの食事が目の前に並んだ。

5日目は、洛陽で龍門石窟、洛陽博物館、白馬寺、光武帝陵などを見学し、夜10時過ぎに西安へ、夜行列車で移動。

洛陽で合流した女性の案内人、車に弱いらしい。車酔いでは、観光案内もおぼつかないのではと心配になる。白馬寺の前では、入場切符の売り子がヒマワリの種を食べている。足下には山ほど種の殻が。早速試したのは勿論である。

夜行列車の食堂車は混雑していた。迎賓扱いの予約席となっており、すぐに食事が運ばれてきた。しかし、まわりを箸をもって立った中国の人々に囲まれての食事である。床に鳥の骨などをまき散らしながら（そうするものらしい）食事を終え、席を離れるやいなや、待っていた彼らに席は占拠された。

西安は遺跡の宝庫である。秦陵、兵馬俑坑、華清池、大雁塔、乾陵、陝西省博物館、半坡遺跡などを2日かけて見学。

始皇帝陵の墳頂部に登ると、なにやら怪しげなおじさんが中国語で話しかけてきた。その手には、古鏡らしきものが握りしめられている。買わないか、と言っているのだと理解した。どこから出土したのかと手振り身振りで尋ねたら、理解したか否か、立っている地面を指さす。始皇帝陵の副葬品と言いたいらしい。真偽の程は別としても、買っても国外に持ち出すことはできまいと、そして怪しいものには手を出すべきではないと、冷たく手を振った。そして、少し後悔する。兵馬俑坑には圧倒された。ちょうど金銅車馬が発見された直後で、特別展示が行われていた。

大雁塔に登る。敷地内、塔内の各所に置かれた痰壺、痰吐き捨て禁止の張り紙。最初は異様に感じたが、舞い上がる砂埃、西域からの風に運ばれてくる砂漠の砂に、すぐに合点がいく。

がいく。

各地の博物館で気付いた事だが、日本の博物館では「監視員」に相当する人々が、監視業務もそっちのけでよく本を読んでいること。通訳に尋ねてみると、学生が勉強しながら監視の役割（監視という明確な役割があるか否かは不明であるが）も担っているとのこと。

西安初日の夜には、現代の華清池の住人とでも例えたい通訳李小燕さんの案内で、近くの劇場での演劇（人民劇とでも言うのだろうか）を見学しに出かける。娯楽はこれ、とばかりに超満員の状況には、何故か懐かしい賑わいがあった。

西安二日目、午後4時前には空路国内便で、北京へ移動。夕刻到着、一泊。翌日、故宮、万里の長城、明の十三陵などを見学。

万里の長城へ向かう途中、黒塗りの車列と行き違った。通訳が言うには、前フランス大統領ジスカール・デスタンの一行ではないかとのこと。万里の長城では、長城から見る北方がやけに気になった。この向こうから騎馬民族がやって来たのだ。

翌朝、北京から空路上海へ、そして大阪空港へと帰国する。北京空港では、北大路欣也の一行に遭遇する。後に、映画『空海』の撮影のためであったことを理解する。

旅の終わりは、何時も虚しい。そして、考古学的な成果は別にして、中国大陸から身体に刻印された記憶は、町々の、村々の市場、そこでのせめぎ合うような人々の群れにうんざりしつつ受け止めた、熱気に満ちたまさに原生的な生きる力であった。それは、私たちが喪失したものであるがために、小さな恐怖を伴っていたことも憶えている。

（北郷泰道）